

# 山口誓子論

——句集『凍港』と詩誌「亜」——

一

桑原武夫はその「第二芸術」論において次のように述べている。

およそ芸術において、天才の精神と形式とを同時に学ぶことは許されない。かくするとき精神は形式に乗ったものとして受けとられ、精神そのものも形式化するの必然である。これをアカデミズム、マンネリズムという。芭蕉は西行、杜甫に学んだというが、それは和歌、漢詩というごとき別の形式であつたために、精神のみを抽出消化せざるを得ず、伝統精神をとり入れつつもマンネリズムに陥ることを避け得たのであろう。

また、高浜虚子は山口誓子の第一句集『凍港』の序で、

或人が、ホトトギスの作家のうちで、一番早く俳句を見棄てる人は山口誓子であらうといふことを言った。私は肯定も否定もしなかつた。(中略)私にしても俳句以外の新詩形によつて、俳句以外の想を自由に歌つて見度いといふ欲望は十分にある。老いた今でもあるが、若い昔は大いにあつた。誓子君が俳句を離れて行くものとして、私は決して憂ひはしない。

と、書いている。いずれも新しい時代に新しく進むための、その形式と内容に関わるものである。誓子もまたそのことを『凍港』の跋で

私の過去における句作は、凡そ三つの時期に別ちて考へること

が出来る。

第一期（大正十年より大正十四年迄）

これは私が、従順にも所謂伝統俳句と共にあつた時期である。

第二期（大正十五年より昭和三年迄）

これは当時俳句創作のステロ版的反覆にあきたらなかつた私が、表現様式の新運動を興しつゝ、所謂伝統俳句を乗り踰えた時期である。

第三期（昭和五年以降現在迄）

これは私が、多くの場合連作の形式によつて、新しい「現実」を、新しい「視角」に於て把握し、新しい「俳句の世界」を構成せんとしつゝ、ある時期である。

この句集には第二期以後のもの——主としてホトトギス雑誌——を自選、収録した。

と、自認する。

誓子のこの『凍港』には二つの新鮮な試みがある。その一つは「素材」であり、いま一つは「表現」である。高浜虚子が自らを守旧派と称して、河東碧梧桐らの新傾向俳句に対すべく、「花鳥諷詠」「客観写生」の評語の下に伝統俳句をますます強力に推しすすめていた時であつた。

「素材」については大別して二つの傾向がある。虚子にその序で「辺

境に鉾を進める征虜大將軍」と書かした、

唐太の天ぞ垂れたり 鍊群来  
凍港や旧露の街はありとのみ

などの北方の地を素材としての詠草と、

労働祭 鑄鍋の係皆出でず  
スケート場沃度丁幾の壘がある  
七月の青嶺まぢかく熔鉦炉

などの近代的な素材を駆使してのものである。

また「表現」においても大別して二つの試みがなされている。万葉語による短歌的流麗なる句

住吉に風揚げたる處女はも  
はたはたはわぎもが肩を越えゆけり

の傾向と、

### 虫界変

蠶螂の蜂を待つなる社殿かな  
蠶螂の鉢ゆるめず蜂を食む  
蜂舐ぶる舌やすめずに蠶螂  
かりかりと蠶螂蜂の貝を食む  
蠶螂が曳きずる翅の檻樓かな

の如く意識的に構成された連作表現である。

この素材と表現のそれぞれの試みの中で、誓子は近代俳句を推しすすめようとしたのである。

詩誌「詩と詩論」の中で、阪本越郎は「新しい形式」と題し、書くことよって新しい形式をもってくるのが詩人である。僕

は新しい形式は革命的であると考へる。

芸術の革命は常に新しい形式をまたねばならない。

新しい詩人とは新しい形式の所有者である。

と、言っている。ところで、この「詩と詩論」の前身は詩誌「亜」であった。「亜」は大正十三年、安西冬衛、北川冬彦らによって大連市で創刊され、第三号から滝口武士、その後三好達治、尾形龜之助らも参加している。そして、その「亜」については、「この雑誌に拠る人たちは形式革命を遂行し、ひとつの前衛グループの役割を果たし」（伊藤信吉）、「短詩や散文詩への新鮮な感覚によって、第一次大戦後のモダニズム詩の先駆的な一環をなした」（清岡卓行）と、詩史上の位置づけがなされている。

その「亜」の作品と『凍港』の句にはいくつかの類似が見られる。そこでこの小論では、両者の「素材」と「表現」を中心にして、互いのあり方の考察を試みたいと思う。

## 二

まず、『凍港』と「亜」の作品に用いられた素材の類似性をあげてみよう。

(イ) 唐太の天ぞ垂れたり 鍊群来 誓子（『凍港』大正15年）

### 早春

(ロ) 雲・鍊・春風のする河口風景 武士（「亜」大正14年）

大砲  
大砲

誓子は大正十五年一月号の「ホトトギス」に、「わが小さき芸術観」と題して次のように書いている。

芸術はわれらが生命の表現である。されども生命が表現さる、為には素材を必要とする。その素材を象徴と呼ぶ。

つまり、芸術における素材そのものの重要性を説いているのである。栗田靖の『山口誓子』の年譜によると、「大正十五年——ありきたりの俳句的風物に飽き、樺太に素材を求む」とあり、(唐太の……)の作品に対して、栗田は「誓子が鯨の大群を見たのは大正四年、大泊中学四年の春。誓子がこのように大正末期に意識的に樺太の風物を俳句に導入したのは、作者の内面を打出す一つの表現として新素材を求めたためである。」と評し、誓子もこの句について、「私はその当時、俳句の表現を新しくしやうとしてゐた。言葉を新しくし、感情を新しくすることを考へたが、言葉を新しくする方が着手し易かった。」と回想している。

鯨の大群の寄せてくる唐太の春の、その曇りがちの北方の天が、海の上に重々しく垂れこめている大景は、そのまま武士の「早春」の詩の世界である。誓子にはまたどんよりと利尻の富士や鯨群来(大正十三年)の作もあり、この句は『凍港』の開巻第一句に収められている。

(イ) 凍港や旧露の街はありとのみ 誓子(『凍港』大正15年)

(ニ) 寒き国境に密集せる都会 武士(『亜』大正14年)

しのめ遠くに立ち  
つかれた低地の秘都の埃っぽい停車場構内にはむやみに長たらしい夜行列車が霧に熱んだ窓の灯をうすらあかるく滲ましている。

(ホ) 港・帆船を主題とせる 冬衛(『亜』大正14年)

港の古風な儀式には

汝がいつも前奏する

記憶は泥深く

鉛の様に

埋もれて

港はいつか廃れてゐた。

(イ)の句について誓子は、「大泊の港の凍った頃、旧露の街(露西亞人の住んでいた旧市街)に行つて見ると、人々は雪の中にひそやかに住んでいた。その街はただあるとただけだった」という。誓子は十二歳(明治四十五年)から十七歳(大正六年)まで、樺太北辺の町に祖母と暮らしていた。

その誓子の凍港の淋しい街と、武士の「寒き国境に密集せる都会」、それに「港はいつか廃れてゐた。」で終わる冬衛の詩の暗い港が、どこかイメージ的に深く通い合う。

(ロ) 郭公や韃靼の日の没るなべに 誓子(『凍港』大正15年)

(ハ) 春 冬衛(『亜』大正15年)

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた

(ハ)の冬衛の一行詩は、はじめへてふてふが一匹間宮海峡を渡つて行つた(大正十五年五月号)であった。そして、その年の「亜」十月号には、(韃靼のわだつみ渡る蝶かな)の俳句が「夜長ノ記」と題された文章の中に発表されている。そのことについて桜井勝美は、

「夜長ノ記」の発表は、(間宮海峡)の初出から五か月後のことであるが、(韃靼海峡)への改稿は恐らく一、二か月ぐらいの早いうちになされたのではなからうか。(韃靼のわだつみ渡る蝶かな)

の句は、「春」の定稿を得た後の満足と、そのころのほころびから生れた句作ではないかと思う<sup>9)</sup>。

と考察している。とすると、(ハ)の誓子の句は、大正十五年十一月号発表であるから、冬衛の詩の後に発表されたことになる。

平畑静塔が「当時の思い出をつらねた初期の出世作<sup>10)</sup>」というこの句に対して、誓子自身は、「夕方が悲しかった。郭公の鳴くにつれて、太陽は西へ傾き、西へ落ちて行った。このときのことを後に回想して句にした時、それは沿海州の空のようだったと思ひ、〈韃靼〉という言葉を使った<sup>11)</sup>」と書いてある。そして、後年、誓子は「安西のへてふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った<sup>12)</sup>」により、お互いの「辺境精神<sup>13)</sup>」が二人を近づけた<sup>14)</sup>とも言っている。

こうしてみると、両者の素材の類似性はその発表された時期から推察しても、単なる偶然とも言えないような気がしてくる。そのことに直接関わるかどうかはわからないが、北川冬彦に次のことばがある。

ずいぶんふるい話だが、NHKラジオ番組で、旧制三高出身の同期生である大宅壮一、山口誓子、北川冬彦の三人が集まった。

ふと横の誓子が一冊の本を開いているのに目が止まった。見るとそれは私の第二エッセー集『カクテル・パーティー』で、その頁に赤線がたくさん引いてある。たぶん誓子は、私の詩論に俳人として一意見があるのだろうと思ひ、その赤線を見せてもらおうと考へたが、初対面では失礼と思ひ控へた。しかし、このことは、誓子がレスブリ・ヌーボの現代詩にまで関心を持っていられた査証といつていいだろう<sup>15)</sup>。

また、安西冬衛にも

〈韃靼海峡〉は当時期せずして同時代人のサンパティを得た。三好達治君の「獅子」、新興俳句では「天の川」の横山白虹氏が最初にマークされたのではないかと思ふ。それは山口誓子氏の〈郭公

や韃靼の日の没るなべに〉との対比をテーマとした論考であったやうに記憶する。<sup>16)</sup>

があり、更に

このへてふてふ<sup>17)</sup>という短い詩が評判であったというのもまあその通りです。当時、阿部知二、田村泰次郎の二人が私に長い長い手紙をよこしましてね。雑誌に詩を載せるからといってよこした。こんな風に新しい文学の世界の人達では、いろいろ論議の的になりました。<sup>18)</sup>

とも書いてある。

滝口武士は「亜」の時代に「ホトトギス」を購読しており、俳句作品を「大連新聞」「満洲日報」に発表し、冬衛らと共に聖化運座句会、朱冬句会などを開いていた。<sup>19)</sup>

栗田靖の「山口誓子」の年譜に、「昭和三年——この頃、『詩と詩論』掲載の詩論に強い関心を抱く——とあり、中野嘉一は、『詩と詩論』のポエジイ運動は詩のみならず、当時のあらゆる芸術、絵画、文学のジャンル、短歌、俳句などの世界にも影響を与えた。つまり、自然主義的な芸術思考から超現実主義的思考への転換といった形で現われた。」と、「詩と詩論」の影響の大きさを述べている。「亜」はその「詩と詩論」の前身である。

『凍港』と「亜」の作品が、実際にどれだけ関わったかはこれ以上わからないのであるが、素材の捉え方には同時代としての一つの詩精神が共有されていると言つてよからう。そして、誓子にとつてもっとも大事なことは、この回想の樺太を素材にすることにより、

われらは個性にみちびかれながら構成主観とその客観との対立の境に到りつくであらう。われらはこの個性によつて高くひきあげられながら、創作家の生命のふるさとに到りつく。(中略)われらの主観はその客観に呼びかけながら、必然的表現の構成に発展する。主観の構成作用は主観的描写とし、あるひは客観的描写と

して、さらにまた主客渾一的描写として象徴の上に具象化される。<sup>20</sup>  
として、高浜虚子のすすめる素材としての花鳥諷詠、表現としての客  
観写生という決めつけられた論（所謂、伝統俳句）に強く対抗したこ  
とにあったのではなからうか。

いま一つの「近代の素材」は次の「表現」とも深く関わるので、そ  
こで述べることにする。

### 三

山本健吉は、「誓子における近代俳句の確立は素材的な意味であり、  
やがて内面的に深まり生命の根源に触れる」と言う。それに少し肉づ  
けすると、「現代の素材の駆使、モンタージュ理論の知的構成や連作な  
どの新興俳句。戦後、桑原武夫の『第二芸術』論に対して唱えた根源  
俳句。その後、即物具象・飛躍法など終始『物』に即することに固執  
し、そこからものの生命の深奥に近づき、俳句に現代的詩性をもたら  
した。」<sup>22</sup>ということになる。ここでは「凍港」における表現を、即物  
的・連作の面から考えてみることにする。

- (イ) 七月の青嶺まぢかく熔鉦炉 誓子（「凍港」昭和2年）  
(ロ) 春 武士（「亜」昭和2年）

敷石の落書 雷

魚 火 葉

「誓子の句は素材の近代的新鮮さはいうまでもないが、殊に七月の  
青嶺」と「熔鉦炉」との無機質めいた衝撃的な取合せがいかにも斬新  
である」と、以前私はこう評したことがある。その「斬新な取合せ」  
の言葉は、そのまま即物的にものを詠った武士の「春」の詩にも言い

得るのではなからうか。

「敷石の落書」と池の「魚」の静かき、恐ろしい「雷」と「火葉」の  
激しさ……これらがそのままのとして取り合わせられて「春」と  
いう季節の静動をイメージしているのであろう。

また、前章で述べた冬衛の「へてふてふが一匹靨海峽を渡って行っ  
た」（大正十五年）の詩において、「一匹の蝶」と「靨海峽」との対  
照が絶対的なイメージを呼んでいる。それについて誓子は、「安西は『物  
と物との共鳴』と言ったが、俳句における『物と物との共鳴』にあっ  
て、一方の物は『季物』である」と書いています。即ち、冬衛の詩の「へ  
てふ」は物としての蝶であるが、誓子の句の「七月の青嶺」はあく  
までも季としての物である、というのであろう。しかし、ともに「も  
の」として即物的に対象を捉えるということにおいては同じことにな  
る。

誓子の「熔鉦炉」と武士の「火葉」の素材は、当時としてはいかに  
も近代的であった。その近代の素材と、その素材を即物的に捉えて叙  
すること、これが誓子の言うところの「表現様式の新運動」であつた  
のである。即ち自ら区分した「凍港」における誓子俳句の第二期にあ  
たる。

「凍港」の跋によると誓子俳句の第三時期は、「昭和五年以降現在迄」  
として、——多くの場合連作の形式によって、新しい「現実」を新し  
い「視角」に於て把握し、新しい「俳句の世界」を構成せんとしつつ  
ある時期——とある。

誓子が連作について関心をもつたのは、「大正十四年五月刊の古泉千  
樞著『川のほとり』の中の「児を伴ひて郷に帰る」と題する連作を読  
んだことによる」という。そして更に、「大正十五年春、齊藤茂吉の『赤  
光』の「死にたまふ母」を読んで、この連作を読めば、私ならずも俳  
句に於て連作を試作したくなる」と言ったという。即ち、短歌の世  
界からの移入である。

「亜」の同人であった北川冬彦は「詩と詩論」（昭和四年三月号）の「新散文詩への道」で、「短詩運動は、来るべき新散文詩運動の試験管であった」と記している。そして、その新しい散文詩論として知的構成によるモンタージュ詩論を説いていく。誓子も相前後して、映画のモンタージュ法により「連作俳句」の形式を生み、「連作俳句は如何にして作られるか」を「かつらぎ」（昭和七年十月号）に発表して論をすすめている。

松井利彦は誓子の連作の作として、大正十五年四月、樺太を素材とした

(x) 犬櫓かへる雪解の道の夕凝りに

事務長や船を留守なる犬櫓の興  
凍港や旧露の街はありとのみ

の三句をあげている。そして、やがて本格的に

(li) 船の美学

扇風機真白し船の客となる  
夏晩のなほ白燈の船あはれ  
朝焼や太き煙筒汽笛をならす

などの六句の連作をはじめ、はつきりと前書を付けて、「地獄行」「虫界変」「水族園」「法廷の幻想」「アサヒ・スケート・リンク」などの秀作、大作をつぎつぎに生み出してゆくのである。

武士も「亜」（昭和二年五月号）に連作短詩を発表している。

(オ) 晩 春

海

鉄條網に群がってるる

音のない部屋で少女が犬と遊んでゐる

沼

木造館の上によごれた爬虫が載ってるる  
お嬢さんが鉛筆を持ってゐる

河

濡った水の上を軍艦が下ってるる  
洋館の屋校を金星が泳いでゐる

林

木の葉の上に青い朝日が登ってるる  
階段で熱病の子供が遊んでゐる

ここには晩春の景がパノラマのような広がりや展開をみせている。俳句と詩のジャンルの異りはあるが、「連作」によってその詩想の拡大をもたらしたのは、全く同じ立場であったと言えるのではなからうか。そして、「亜」が「詩と詩論」の前身であるだけに、このことは大いに注目に価するのである。

また誓子はその後、「近代俳句は、気負へるその名の示すがごとく、断乎として伝統俳句に反抗し、これに対しては微塵でも礼節を弁へない。近代と伝統、この両者はつひに歴史的な対立である。」と述べ、

(ウ) 大阪駅構内

夏草に汽罐車の車輪来て止る  
汽罐車の煙鋭き夏は来ぬ  
汽罐車の真がねや天も地も早  
汽罐車の車輪からからと地の早  
夏の川汽車の車輪の下に鳴る

を発表して、理論とその実践をゆるぎないものとしたのである。

句集『凍港』と詩誌「亜」、それはともに「近代」の名を背負ったそれぞれのジャンルの先駆者であったのである。時代の要求、時代の必然として、互いにどこかで影響しあいながら、まさに新しい波——一つは新興俳句、一つは現代詩——たり得たとと言えるであろう。

## 注

- (1) 桑原武夫「第二芸術」〔世界〕十一月号・昭和21年
- (2) 山口誓子『凍港』(素人社書屋刊・昭和7年)
- (3) 詩誌・昭和3年9月に春山行夫、安西冬衛、北川冬彦、滝口武士らによって創刊された季刊誌。
- (4) 伊藤信吉『現代詩の鑑賞』上巻(新潮社刊・昭和43年)
- (5) 清岡卓行『日本現代詩史』3(右文書院刊・昭和48年)
- (6) 栗田靖『山口誓子』(桜楓社刊・昭和59年)
- (7) 山口誓子『茂吉の下流』(短歌)十月号・昭和31年)
- (8) 山口誓子『自選自解・山口誓子句集』(白鳳社刊・昭和44年)
- (9) 桜井勝美『一〇〇万人の現代詩』(宝文館刊・昭和61年)
- (10) 平畑静塔『近代俳句大観』(明治書院刊・昭和49年)
- (11) 注(8)に同じ
- (12) 山口誓子『安西冬衛の詩業』(俳句)三月号・昭和41年)
- (13) 北川冬彦『詩と俳句』(朝日新聞・昭和56年9月20日)
- (14) 安西冬衛『韃靼海峡と蝶』(現代詩)一月号・昭和23年)
- (15) 安西冬衛『現代詩について』(三立評論)七月号・昭和31年)
- (16) 本人より直接
- (17) 拙稿「研究ノート」欄(朝日新聞・昭和56年)
- (18) 注(6)に同じ
- (19) 中野嘉一『現代詩物語』(有斐閣刊・昭和53年)

- (20) 山口誓子「わが小さき芸術観」〔ホトトギス〕一月号・大正15年)
- (21) 山本健吉『現代俳句』下(角川書店刊・昭和27年)
- (22) 拙稿「山口誓子」〔近代文学研究〕——『国文学・解釈と鑑賞』別冊、至文堂刊・昭和61年)
- (23) 拙稿「俳句と現代詩」〔国文学〕十二月増刊号・学燈社・昭和59年)
- (24) 注(12)に同じ
- (25) 注(6)に同じ
- (26) 同前
- (27) 北川冬彦『詩と俳句』(2)(朝日新聞・昭和56年9月10日)
- (28) 松井利彦『昭和俳句研究』(桜楓社刊・昭和54年)
- (29) 山口誓子『近代俳句小論』——機関車の詩——(大阪毎日新聞・昭和9年5月19日)
- (30) 山口誓子『連作是』(俳句研究)十月号・昭和9年)に、  
連作俳句を単作俳句の延長線上の新領域と見る。  
○「個」から「全」へ——連作俳句の「個」には季題が絶対に必要だ。／連作俳句の「個」の独立性は絶対必要だ。／詩との限界を厳正に。「自由詩への危機」を警戒せよ。俳句は裁断詩であるが、自由詩の断片ではない。  
とある。

—昭和63・9・30受理—  
(本学教授・国文学)